

志保之利

三篇  
十三  
止

1	曾	5
508		
43		



45  
508  
43

あはれり三卷之十三



○明王百穀明萬曆中人也三拙曰五難姐十五庖之拙者椒料多匠之

拙者箠釘多官之拙者文告多云々

之拙者一郡縣の吏無に禁約文告の詞と郊野

布内一利害と條陳より此議連篇累牘己り貪と

かく一自其虚と所ひ之拙者之を以て之を以て

取らんとする其多に官人とありて拙く由乃おん

蓋あり者也

○藤原信頼友原成親多き初重殿上人より男

とて寵をこれより也幸甚しく細きよを以て

あはれり相國ち好の事ゆゆ々貪禁の念あり

三礼也後一君の河也海あり自七引一を河也海一  
伝形ハ平治の亂をよ一て誅をくれぬ親ハ母元の  
誅賊にして死をり二卿ハ後白河帝男女の  
幸後をり一



○我府より見暴深の病より一善よ死をる若後し  
夏日を諸醫大匠とて一善く治療の方ありが如し  
食厥気厥の類亦多ハ暴深に混一見分り申一  
と謬る若少のれ去年亦以來ハ朝鮮の醫者高奇  
斗文ハ府下江野を來れとい彼曰は症温極を解  
せりとせりと互に治の業を以て療を一一と一節を  
考る温補を考と右に反きり彼世病とた一かよ只  
知ると云一に長湯より可り後を江野曰彼謬る  
及のれ多しに依て一療方多一か一凡そ西國ハ  
暴深気厥の症ありとあり一を治方多くハ去  
り一す当世の古代考ありと去甚高く水気温  
也一是に感一生者人あり一脾胃気弱一を漏泄  
一あり一産後脱血脱氣一を暴死を考けよのみ  
多く中も人あり一と一又高く竹の故あり一と一世に  
て高次の業多くハ害あり一と一温補の療も熱を  
也やそれと一重脚部波乃ハ亦於今人多の大劑と  
めらゆら是に依て又害とあり一事多一今日家人  
温劑よるれ高次の業を用一と一と名れゆら故あり

ぬ事同く有りとも由と云り

○六月乃末漢人そよそ持ありし西國より移居故文  
の物多そ頭を祀し解れ新れそ身を動して右祀と

と覆し侍る祀人そを懼ると

云けし乃をある所かく

して終の尾よ遊きあり瀘ガキ

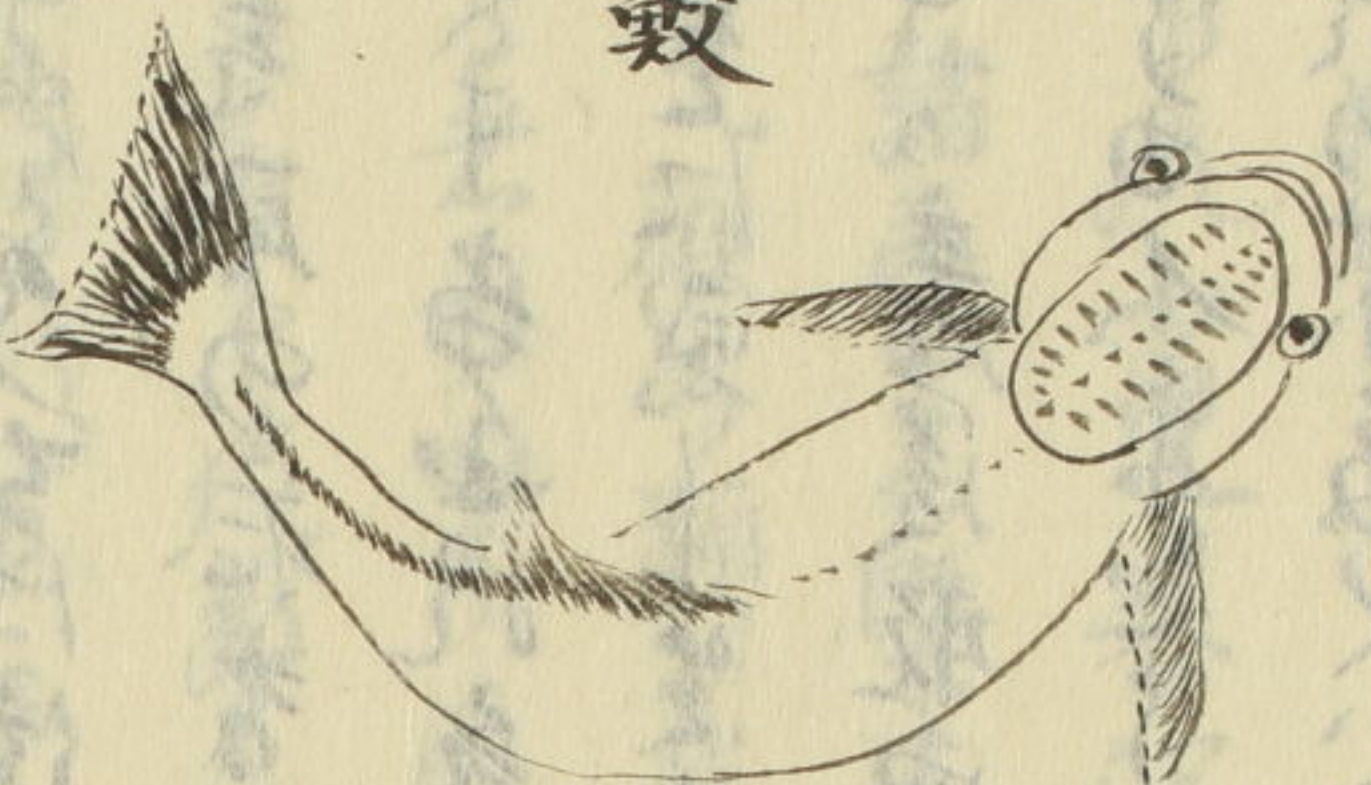
よ似たり物は解てまわれずと

送よのればち侍る故もよれ

ハ小判の名漢人の名はけら

るよやけりし小判の裁り

やしたるもさるるハ小判裁りやつら新式も是



小判鮫

金持乃夢にありたり因果の染るとりか屋をよとつり

き又物祝する人小判と裁くとく収して海難の

標りきりしと海をあらとつて祝ひ匂る時ハ目

か度物と一範ハ片あり貝とく忌多くとまると思ひ

云一い矣世に多く祝儀のたゆま高き水に用れ

侍るよとまれく有り故人もよに侍り虚言乃祝ひ

ことしそあは海くかひくしとられ

○お家々のあり

○田舎のま(あ)とまあ(あ)の山うの心あれて言てそあれ

又お頭のがり

田舎のま(あ)とまあ(あ)の山うの心あれて言てそあれ

これハ少量身絶よる田交田有宅交交宅と説かふるん  
ありりり

○或傍赤食の時戒人と相斗と云これハ本記よりハ  
何ぞと問ハ天竺の事ありと云いつくして持し如と説く  
くと思ハたりしに比破糖より高糖(まかり)に暹羅交趾  
及ハ阿茶陀琉球等此破糖ありと云はるる液を  
之國に産ありりりが前に傍のとらしと云ふ  
ありりり

○佛經に一人自沸く湯鑊に入れて骨肉を熬煎  
其齋を九食し一牛とそり焼く梅くに花柳抱  
女を身とて八の家よりこれハ症を販て活命を云是記

○世奥野田の沖小を

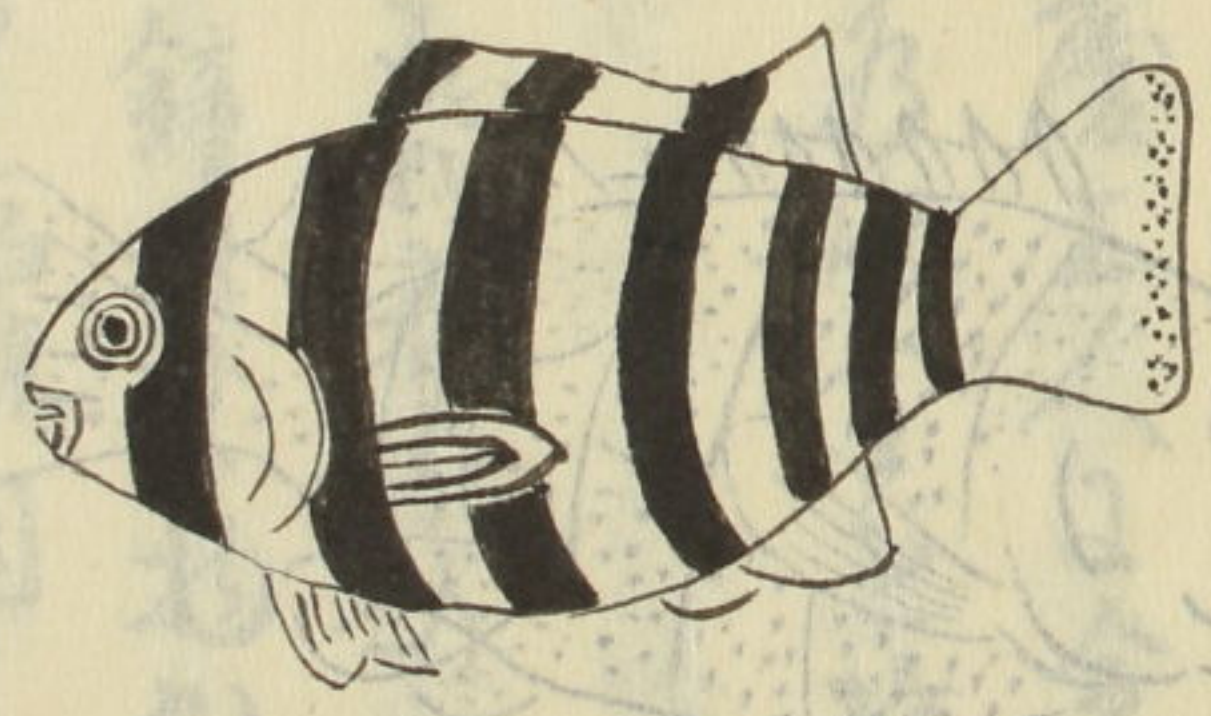
漁者も其名残詳小

世は清臭ると云り

細鱗なるらわれいめ

とく味わろくくく後

其のそし



○又一説は... (faint bleed-through text from the reverse side)

○又一種點鯛と云はり是

馬細の類にして是あり

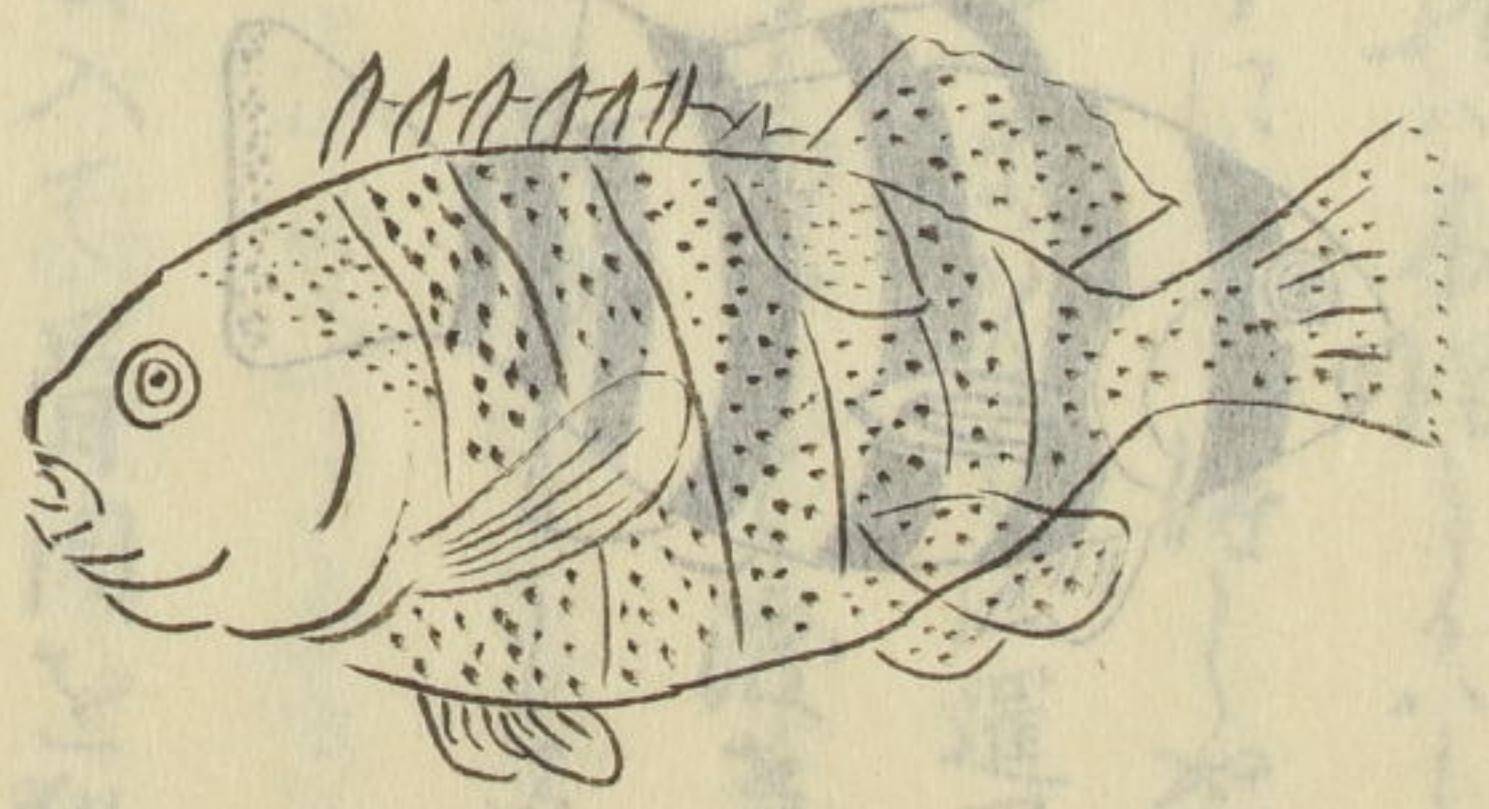
物あり海中のそれ類あり

ありぬかしらるる類東海

西洋小瀬南瀛凡そ是れ

ハ生れとも同しかし

作らるや



○洛東真正極樂寺真如堂不退轉の念佛ハ河州玉子珂

屋上人我瑞竟西相との沙おれ願と分て始て初し

より永く修せふ修ふ南無大寺念佛堂の常盤

春の院の芳々の意松院の工慶上人より命々靈

仙院殿望珠院殿再夫人此沙おれ念を捨て始

初ハハハハハハ

○鼓乃立見と云けハ心もくも立ハおれ春分の音にて路

整多生れおれおれ之凡俗通因鐘聲ハ物かあしく

云ハハハハ秋分路おれ音故の音白虎同し念を

かす鼓ハ清爽にして産んと断りて是立秋の音

あり故と也五経要義の意

○ 府下負醫者

信房町下がき  
町に註す地

の女あり嘉子よふおひと

教ありし家つとあり害とて再親欠き若

しむと毎乃愁とてしむと若きよかりて頃

ハ業方業にころりからありし卯月廿六日に伏

死り方自刃のつとをふゆくと申至葬世の儀

ありと誂しを煩しらす才乃終夕念しと親より

月名をそとに凍餓に死し心し死して中

のあけらかりしと再孝ありし一時の憂も若

回しつとありしと若きより作らんと書ける

ありしとありしと若きより年廿三と若き

ありしとありしと若きより年廿三と若き

ありしとありしと若きより年廿三と若き

ありしとありしと若きより年廿三と若き

ありしとありしと若きより年廿三と若き

ありしとありしと若きより年廿三と若き

ありしとありしと若きより年廿三と若き

ありしとありしと若きより年廿三と若き

ありしとありしと若きより年廿三と若き

ありしとありしと若きより年廿三と若き

ありしとありしと若きより年廿三と若き

ありしとありしと若きより年廿三と若き

冥初は湯一たびくるといひく人あふも能す此  
感一合ふるとありてに系むかりて湯ありて  
履きて死するるとありては多きを食ふてあれは世に  
るありとされ者よありては多海永移るの門は依るなり  
瓢と掃り物をよまるとありて初先食と力と免よ  
といひてはよまるとありては合と合るなりははをれ  
うさ身のみよまるとありては人しをあましけれよ  
死してははしをばしとありては終るは川のみて  
流ありてははしとありてはありてはありてはありては

○数珠の多少經況如何曰瑜伽念珠經云念珠分別有  
四種上品最及中下一千八十以為上八百八珠為最

勝五十四珠以為中二十七珠為下云々其他四十二顆  
及二十一顆之念珠ハ陀羅尼集經ニ出十四顆ハ數  
珠功德經の說見(きり)近世三十六珠の念珠也  
用是出處と不考按方に一百八顆と三分にして  
製と物あり

○初よ余るを禁河あり先記佛の辭ありとまはしあり  
をしとありては初に返すとこととありては  
にも同し禁念ありては初中にて著成快子と  
小著と作と度音とありては快子とすと  
○玉笑零音云人之初生以七日為臘人之初死以七  
日為忌一臘而一魄成故七と四十九日而七魄具



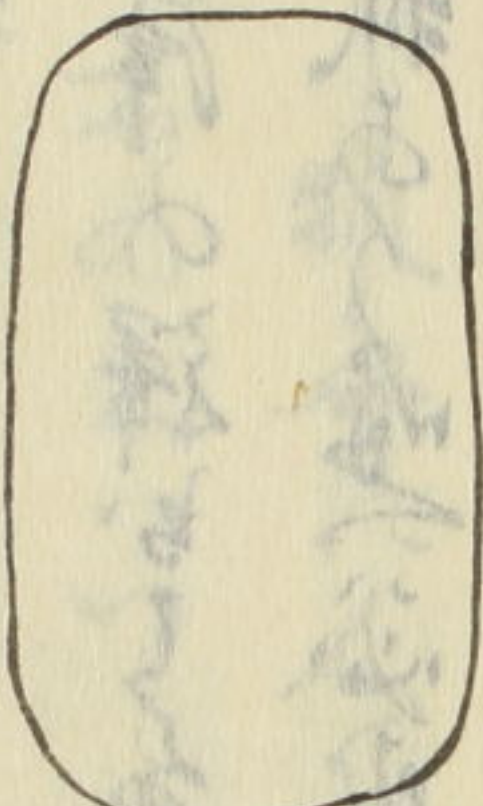


去月十六日唐船遊捕三機達上聞と云今度踏地  
 打拂の致方宜と見たり自今以後海流く若く  
 以通と打拂の事右機流多和記よりと云後方  
 之流多し和記機を度三機と見たりと云後  
 和記の儀も和記に付る事地よりありく和記の和  
 和記の方もと云達する事此と云

又月

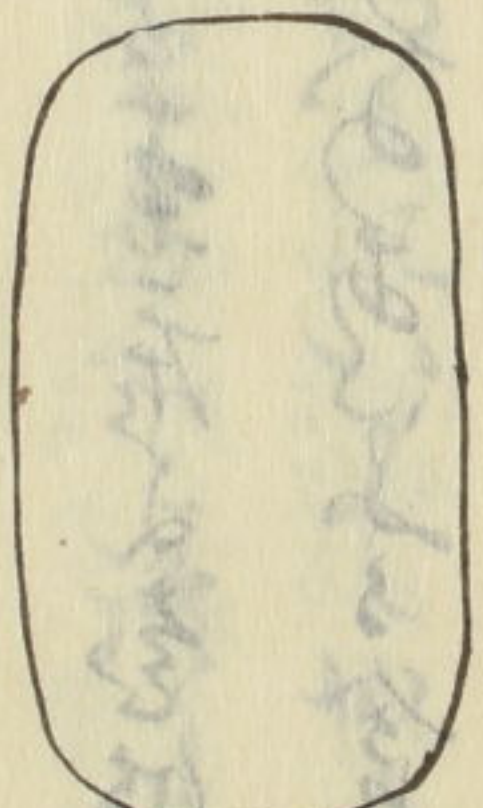
私云流地和記は流船遊捕三機並より三機下  
 の事同付流あり  
 彼流船遊捕を和記と見たりありと云和記をよけて通  
 あり海と見たりありと云和記をよけて通

長二  
寸三  
分可



重四十四分

長二  
寸



重四十三分五分

右位右の金圖あり享保二年丁酉十一月二日濱州志  
 那歌之井村の野島村よりと云新注の圖六つと云と云  
 不更かりしり一先のけ圖にそとそ地とありし際  
 是のころは昔金と取振出せり六つと云 同は七日云  
 傳は八月あれと和せり今九山判二十日と和  
 に編十二日と云何の代誰理あり也和その所  
 時智多歌但より保十二日と云と云

右金と見付りしつれも世にありたり 戦國後かこま  
そり付り付埋けし後元かまんとしむあしつ  
さる者多かりしつれも金銀しつれも去れ店小埋れ付り  
とのもこしそ人しつれもさあし凡付室の一旦ハ我れと  
ありた付ありて去れ後ハ人の物とありてけあしつ  
付りよのとね海つたに取れは執して貧者是し財也  
し小身と雲と赤りしつれハ利ハ感ふしつれ先傳新  
こ教養之

○ 陸河津津の驛かまあれんとする者店よをほあしつ  
去まに瓶ありて必しあしつれ人のあしつれ今をとり  
仍と心し小白餅と穿てつれを瓶森のさしつれか人も

あまれする内海への白餅と投しつれハ届けてくましつ  
さ付りし瓶毎に人をねまれ付りしつれかくしつれ  
侍りし人雨のましつれあやしつれ事あしつれ流り付り星  
俗小世瓶と今川新を橋とつれ

○ 本市場 吉宗と藩  
系の間 酒店小 万貫屋  
三右衛門 近年白氣多くる家の中二  
階の隙ハ棚ありしれ小糸とあてたけハ氣おまあ  
しつれおつて中より取れあしつれあましつれハ餅とま  
又又小二氣と入るるを裁後急のしつれ毛巻の如し  
眼あしつれ口地あしつれ紅ありしつれおまおまはあしつれ  
よよ又又くしつれ白氣あしつれしつれは又又付りしつれあしつれ  
彼を洞ありしつれ呼ハ必しあしつれしつれしつれ又又あり

抱朴子に白氣の事と云りて流ありていふと云り

○富士流をそ押すと云り対野菴云いでの里多々泉寺著  
まれば物の四流より福師坊流傳りて云り元禄十二年  
六百十年流をそいりありていふと云り

○日蓮黨の受謗絶とてあり申はし流二流あり  
て久しく世人と惑はせり寛文六年天下に令して世  
邪流を禁断ありては彼余黨を以て惡國流とて呼

彼よりいへば時々令ありて是れ尋禁せしむる自言  
元禄夜に及んり  
何邪流を刑しそを流め大願天台の末流  
とありあり東谷中國の宗碑文右流の如  
ぬれも室永日年の比富士の流  
是れ何れ流の  
むる邪流あり 又よ邪義  
と云りて一黨の坊主系禁断流罪ありて云

正徳五年常呂古浦及び強州邊より五家衆盲相

派と号しあきりて邪説と云む故に有るに令して

是を刑する所今年享保三東都に三島派とて又邪義と

勸毛今世富士門流の邪信三説と云者  
東谷より邪流と云り三説三説 是を中宮に依て

様の子をそとせしむ生向の事と云  
邪師の考ありと云 又よ日蓮の像をそ

と云るぬる像をそ會て印をりてこれをそ流を傷む

又の事をそ惹てぬる所小こりて流を招き邪義

をそ契利新當の流を似たり故に幕府の有司に

と捕擿ははるる市井小令し其同類と尋るるに月より

六月小あり扱十の悪事と云りて凡日蓮一夜諸宗無

得道の悪云とてよりそそ子日眞  
富士の流  
の紐 日計 東の顯  
寺の紐

等流を流しゆく形義とかけ縁に世に余一過よた道とを  
流す云下に毒を流す一多又多故これ小悪の刑ふあ  
者多一寛文断段の後世度りこまを改め國家を教  
る人民を和証する事蒼蠅の教して又集り妖術の隠  
れて又出るや一佛法乃大害のこある神祕のあり王國  
乃賊如者これこそとひ少く悔ふんや

○京師本國寺ありと律にて淫婦とかく一是をぬと  
咄ふサヤとふは度六月十日夜詔日のむ教二百人むかり  
括き一押入て淫婦七十余人を捕一其布星に迷一彼  
形流すとてん凡奥者の肉と斬一礼行ふ法のさゆ一対  
にありしれ一西月とあら事大か一徳を流す事に

○内り本國寺ありと律にて淫婦とかく一是をぬと  
本國寺今ハ六事とありぬ一しつらるの流ぬとされて  
妙満寺妙顯寺等流坊ともされとてかく一をける妙成  
方一とあむせにが一りくとあて

○寺ハ昔むしゆ一とありぬ一大悪をひのけていぬれと  
大悪と云もかく一をぬの異流あり

○王祥登り岩越志よ粉傳面これと都作也帝母とふ三風  
青樓倚門の伎小兒白雪推結甚とら美少年名如星中ト  
いとくも我國名物の婦人梨葉流少年淫客と云ふとまの  
酒和漢吳成事と一と名たり一京師本國淫婦と  
たり法良の於會好まの姿多しとれとく一是を流す

一と世に於て是れより傳りたり一人云築川の東に家の  
民は乃人倫も是も其也と謀に一人身而云是一人と  
り跡留白粉紅雲の如くも是もすむくつけと教とあり  
と流る本芳の嶽(形)一吏の云ある山家の一人と云え  
民のこあり如くは之れ谷くけに草昔蒼あり一月を  
の髪あぐく生を一人を是の一人と云えはと云と  
り〜〜も其やりり〜〜一人は福と云も職はとて  
ある時や傳り一人云つて〜〜後ハ物と云りり〜  
世と云け名を流り一人云〜〜と云也〜〜と流り  
一人云云〜〜の山の東海の一と云目あれの事と傳り  
○昔仁徳帝は河内飛騨國に西面は是乃人あり清景に

して帝に臣従と史に傳り世は人濃く不縁作一人云ハ  
日新寺と云て其云の古寺あり龍音の神例を云ふあり  
寺ハ法法入師の聖基と云り

○小治の寺よりハ後光嚴院の宮院事と書きり小治の  
福利は古記あり藤河の記ハ一系福園記と云け是れ  
濃州ハ入りの時の記あり神園記是女利貞と云の  
と相法と号一人傳ては昔の法泉寺に牌子ありと  
あり舟日記ハ立政寺にあり其録ハ

○小治の寺よりハ後光嚴院の宮院事と書きり小治の  
○五百二十六石五斗八升

家八十七石七斗七十一

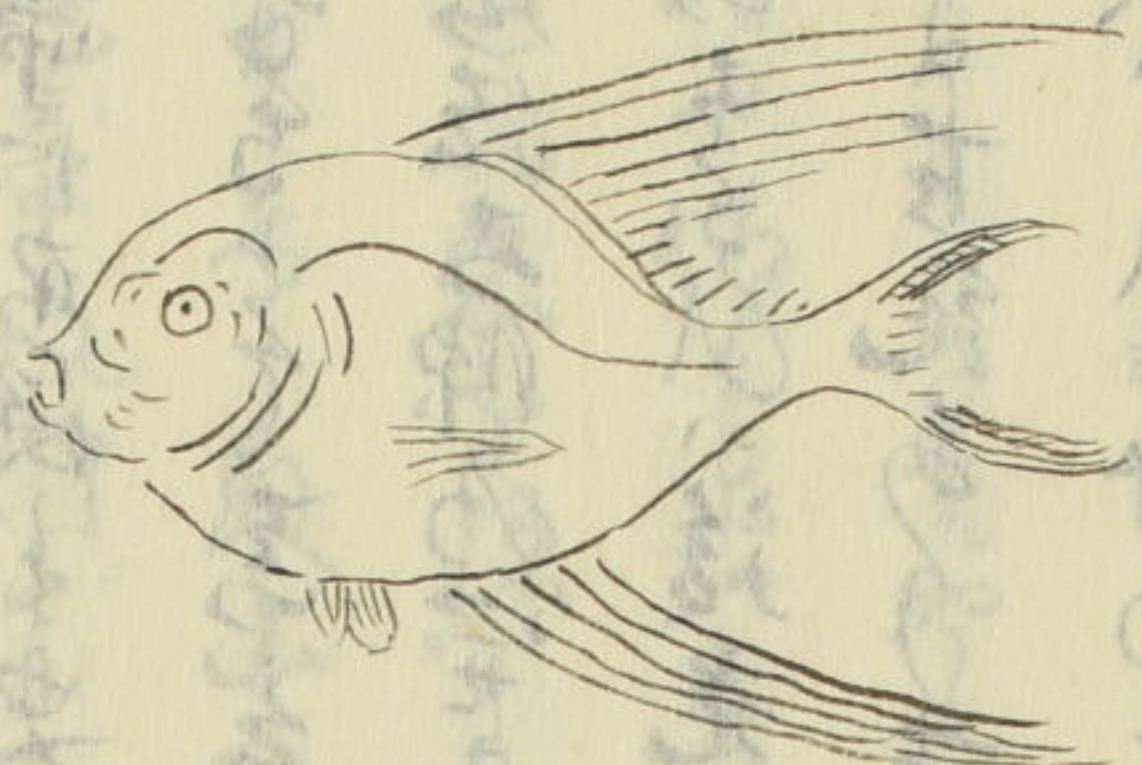
長心  
王らや

正二甲申年九月五日

魚

右小富家乃能文あり是も亦一家の書式と見えたり凡そ  
人（孫）の事ありて多し一多くハ殿古も是もそのうも同  
業此人能に何や極之小富えなり言ふ多し好む家  
人の事思ふありと云ふは

鏡 魚



背取の鱗  
如の如く

鱗或ハ鱗の類ふもふと

ハ鱗よをハ鱗ありて

ましくハ他福身雲母文銀

泊の如く味身ハハ鱗を

りハハ鱗

平山海の号物と云ふに毎に二巻を記し人ハハ鱗を

○丙午六月十八日上杉輝虎法名不識院謀信の靈を一祠よ移ハ江州

膳曹の神社の境よ社を建上杉靈社と号ハ是井伊家の人西々義忠及此

州人宮田十郎左衛門吉田三郎

○享保十一年二月太上法皇院令ハ依て栴丘寺宮中使

とナリ勇徳國多々廢那多廢山古石の礎ハ石と波ハハ

御ハ七ハハハ付續日本記元正帝靈龜三年九月孝江を改元の

記也書ハハ賜リ

○樂の大石ダイク鼓カ方ハ三ツ鼓カの右也 是雲

右雷カの古文字あり惟幕此紋も大石鼓の紋と云ハリ

又雷魚ハ鼓の形と云ハリ一雷魚ハ鼓の形ハハ雷神の

魚あり

日笠尊氏紋

雷紋俗よりつまといふ

尋雷ノ字

雲紋俗よりつまといふ

○或人曰信禮に瓜と貴人の希にてまむり時と皮とを  
りて上のものを標よしく輪切にして丸を捨つる如  
何ある故と回り予曰是礼の玉簾に瓜の作り曰瓜糸  
上環食中棄所標と流し上環模切之圓如環也といふ  
と流し食と進む時ハ先神は薦め流し食瓜ハ昔  
あにまへに竹の皮あり

○浪水九節は徳源佐藤は尾州古渡村の人こころ子流り又  
た為の魚たふ作る名伝とまふ字を為の猪直同玉流海と生る

母の祐を冒してちるといふ



七月の初幸多の者かゝる魚を扱ふれり何と  
と四ハるぶさうといふれはさうりやう  
はやぐの世美と目類にして又形を号す  
す倉敷共吳甲介の歌一類するて方言  
又ありたてを味と名同といふ

○加久縄江沢書写終りて久字をえの字に代り兵者も  
亦あ考加久縄ともせり田口存岩改紀姓弓削以  
言為大江鑑也赤点者誤りて田口存岩改紀姓弓削  
以言為大江と点をり須菩提とス（カラク）菩提スへ  
ト点を一例り可



○福清左馬を又正別の才掃部中司類ハ皆其長清石を以て世  
 々後和別字多一福清ハ石万 物々ハ形もて順を致し其皆  
 州山田に任せしれ此丘尼の寮に舎を信とありしに  
 何舎を以て尼よと云ふれと詔浪を以て  
 ○中多正純の浪人幸同言多末と云者ありて子伊勢よあり  
 ○同の山より掃部中司の男二人と云々福清は其弟と切致  
 せしるどもあまの病と云ふりしハ其のまゝとて人なり  
 告しハ其弟若原志摩者ハ福清正別と友とよあり  
 一上幸同正純の仁かりし海一河より一故切腹中事  
 一保りし進言此掃部中司高とて幕下ハ其れハ福清加  
 六ハ彼幸同に討れ一兄弟の肉兄弟の孫と云ふこと一  
 ○朝廷の樂官十七家者自次人十七家云々幸同末人十七家

初ハ官府執儀者自神祇云々幸同の寺産とて一と保り  
 掃りしハ進言和別神南村和名よよみしめみる  
 今ハハニニナニト呼一と保り  
 其名の代と三所末友の以より一掃り 各家分祀あり  
那の糸友ハ其方天と云  
 ち方そあらんたたと云

○今上新殿遷幸次第奉行尚長朝臣正露寺  
 左中將  
 兼日行事之上卿辨等参新造内裡奉仕御装束  
 束當日之早且神祇官奉仕大殿祭先諸卿  
 参集陳次奉行職事仰召仰之事ヲトセ於大臣  
 退去次上卿令官人數較次上卿以官人召大  
 外記仰召仰之事外記退出次上卿以官人  
 召辨仰御興御装束事辨退出次諸卿起立

出御南殿代立御御帳前内侍授劍璽候御帳左  
右近衛引陳次公卿列立陰陽頭奉社反刺次  
團司奏次少納言鈴奏次中務省取版位次寄  
御輿於簀子上達部將離列階下掃部寮敷  
筵道次上達部將上蔭外階崩鞆戸進持御  
劍内侍前跪取御劍入御輿退候

宸儀乘御大將稱警次吏進持室内侍前取室入  
御輿退候次御同輿御生次又初將參進崩鞆之  
戸降階加列次御輿出御於御門下大將仰御  
細諸臣供奉前後御輿到兼明門神祇官獻  
大麻雅樂寮奏音樂次御輿入御承明門暫

留陰陽寮散供咒術前行次公卿立南庭東面  
次奉安北上

御輿於南階簀子左右大將及將候階下次上  
達部將參進崩鞆戸取劍室授内侍

宸儀下御大將稱躡次御同輿下給次初將更  
參進崩鞆戸降階退去次

立御母屋御帳前内侍取劍室候左右次撤  
御輿大將上達部等退加公卿列次中務置版

位次少納言鈴奏  
宸儀入御清涼殿豫敷次諸臣退出次  
着御直衣更

出御書御座 供五菓陪膳典侍役送<sup>六</sup>廿藏人次  
入御次供夕御膳信膳藏人頭役送五位藏人

次於直廬藏人覽吉書 先官の方  
次藏人の方 次下吉書於

伏座上卿 次上卿奉行如例次諸臣退出

室永六年十一月十六日 天快霞

同日夜 内侍所遷座

○仲み十六日主上部内裏一遷幸ありせぬ風聲  
のともるりに鈴の音りけりり夕を臨座ありせぬ  
たありとて一物一もれりり

中院 從一位内大臣源經茂

和方の浦より舟にて信る菅田鶴の雲舟にのほりありしに

○式部丞藤原為経は、弟重仁に、後醍醐院御籠を  
の少年ありしを、江曲の住人二階堂某の書ありと  
ありて、輕倉下りしに、ぬに雲のち流むかしとて  
れすくちありしとて、さまでとにありしれかし  
内りしとて、一首の御訓書成りし

○東河のを、子尾に、ありしり、別よとて、かよふに  
おぼしと、おち申に、是なりし、元弘の乱、新田家  
とて、くしと、おち申の、軍争に、志あり、高功の、名ありし  
とて、おち申お績し、て、式部丞、補持氏、の、付に、あり、奥州  
岩瀬郡と、成せし、二、万、正、平、甲、に、を、承、て、ひ、し、り、  
左大臣記  
右大臣記  
二、を、し、り、

○太平記の成神の改補の事多考に疑ハ時代相違  
あれあり甚久貞久ハ河内家を曰成百六十一歳  
上歳七歳あり

多治大政成平 松下成久 林正西 以正西ハトト見

舟之口と成久の三子と稱す

森經久 梅過 富野森 園本流 以正

家と合して 聖歳七名宗と云 甚久ハ森家貞

久ハ松下家貞

○山村良景 甚久 辭世 詩

死生有命豈何驚 况又武門一夢榮  
○常護宇関 居要路 閑擁書劍到深更

為臣爭引万般恨 憶弟遥伸千里情

偶向廟前人若問 紫雲宗嶂是吾名

○山向の在る海牌の堂にあり新迦の本像ハトと櫻  
田乃位堂に在り一且荒廢の後多日佛像の  
ありかたをとりて捨て捨てて焼くは怪りやと或  
人彼像を懐く火の中より免がせしと傳海の文  
も此々再興して海をとりて

○享和 正徳 元年 六月六日 養心公十三回乃心忌辰一有歌詠



学者八家がしこ顔小極く難く得るあこの事小は行ん  
 ○今世世録といふむりしは封戸給分職田位田あり  
 ぬやりのりし給と稱すし一布帛乃類小し一糸穀も  
 けしす給令と考ふん一糸穀を料と稱す一  
 親王田親王妃夫人女侍日よ糸令て糸令とす糸  
 あり月料令料  
のまあり

○古文武友人のり料といひ一又糸は何しは給あり  
 文友一位五十貫文二位三十貫文以下初位二貫又  
 十文小あり又武官は從三位二十又貫文從四位九貫文  
 より八位二貫又官文小あり蓋後世分給る處の法の  
 目てありありとそ之傳る古ハ武士小地と賜るとり給  
 佃料と稱するを以て考ふは太平記母妻旅たあり  
 半成りあり二万貫に及ぶ大庄ありといふは給の  
 法ハ鎌倉初年統時よりありといふきり

○古一國司の年給料  
 山城國云麻稻凡拾万石束 凡稻万石束ハ妻束あり  
 守給六分稻あり束介給二分稻 三万石束三百三十三束  
 椽給三分稻二万石束あり束目給二分稻 一万石束百六十六束  
 史生給一分稻 八千三百  
三十三束 但史生三人合二万石束  
九百九十九束  
 諸國准之可知也信國大小下稻束者是別裁詳于  
 令義解等也

田一町 長三十步  
廣十二步 稻束凡五百束也十町別子あり束百町別

五万石也然別國守之給地二百町也外位同八町山城

之上玉之守從五位下  
並別位同八町也

職分同二町二段 上國 介以下畧之

○此の割後世と号するものと号す一凡國小公田  
公麻田職同位同切田口分田号の多あり又親王  
大臣乃封之りり是中世の元号とて國目此  
と號すりりす一と之翰の地あり一賴朝の守護  
と至地此を補してより昔代を以て要たり後世  
亦すに切之力次第に此地を以てりり一に  
守護地此の号も此れて主殿至己の家の地を  
仍ら慶長五年天下一統の後主殿分定り皆大樹

○殿下此命にりりて領之中世の風俗も多あり今統の  
とれ之と此あり一封建と同し之南又此ありあり  
あり一と此信と心傳りも之儀ありありあり

○古國目の記

上總常陸上野ハ石守と稱す一親王之の位あり介と  
文成とす 和記と歷の  
人ハあり  
伊豫攝磨ハ口位上宿行一並江丹波海中六島の  
國 九早の事ハ  
あり  
山城大和八侍の職あり一志摩ハ三務氏代り一  
六位  
飛騨越前信濃美濃對馬ハ一と六位の位あり

陸奥ハ志ヲ廢シテ故テ人トモ非ケルハ也

近江載前丹波播磨等此伯耆伯中伯后周防伯

讃波ハ冬儀の勲國之 也

諸公の擢内舍人ハ任下練行る故也文章生ハ

任山海海綿文法為蕃客

右從三位等勅令平基親の官職秘抄に是より

是古一の創より中世以來ハソレと云ク混

任より先王の法稍遠ハ信リ一と國勢に於

て之日廢の進止あり一文化以來一變一應に

文明ハ書ハ換あり

○朝廷洋買の年詔れたた

或記云先々の神をの<sub>レ</sub>後ハ右の神ハ存る

一又たそ<sub>レ</sub>蘇あそむと云<sub>レ</sub>地阿百首お賢の交に

柏本に推の<sub>レ</sub>技と<sub>レ</sub>海てれたた<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>海入り

○た迫右進の<sub>レ</sub>任下<sub>レ</sub>面<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub> 常<sub>レ</sub>廢<sub>レ</sub>廢<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>西<sub>レ</sub>より右<sub>レ</sub>東<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>方

云子<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>沙<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>り

○沙<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>源<sub>レ</sub>氏<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>こと<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>あり

○三浦守法<sub>レ</sub>神<sub>レ</sub>陸<sub>レ</sub>奥<sub>レ</sub>守<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>女<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>阿<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>沙<sub>レ</sub>云

によ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>なり

毛の<sub>レ</sub>波<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>只<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>六十<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>冥<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>半<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>なり

此<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>堂<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>也

次<sub>レ</sub>帝<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>源<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>彌<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>徳<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>下



○石清水神主別當系圖畧

紀兼彌 武内宿禰十八世山城守兼彌二男 一曰友井子也云云

御園 彈正大弼 御豊 石清水神主 始從五位下 良範 神主三代四位 上自是代相續

行教和尚 石清水開基 按授大守寺 直濟僧正

益信僧正 謚本覺 大師 安業 石清水別當始

延晟和尚 別當二代 大守寺 良常 神主 聖清 我國法印 始

技真 神主 定彌 神主 安定 神主

春實 神主

世裔代々相續し今乃又至る系記は伝承す  
初使々源氏云々あり初友ハ神主家と云々の事  
大守寺と立交り大藤ハ佛生と云々の事あり

○本紀帝王本紀雜氏本紀 庶氏本紀

右氏族三本紀 其他地神本紀録大己貴命之後係

系圖

神皇系圖 一卷 藤枝馬子撰 帝王系圖 一卷 舍人親王撰

續帝王系圖 一卷 菅原為長撰 帝王廣系圖 百卷 平基親撰

帝王系圖畧 一卷 卜部 泉胤紹運録 二卷

諸家分脈系譜 十四卷 有本云云撰 和氣譜 一卷 清麻呂撰

大中臣本系 圖書寮諸氏系圖

記録

神別雜氏記 三卷 新撰姓氏録 三十卷

傳記

藤氏傳記 一卷

大織冠 一卷

淡海公 一卷

武智磨 一卷

大政大臣源朝臣

一卷 嵯峨天皇皇子

大臣傳 六卷

大將傳 六卷

菅家 一卷

江家 一卷

紀家 一卷

小野 一卷

滋野 一卷

橋贈納言傳 一卷

良大納言傳 一卷

吉備傳 一卷

以外若相公野相公等の傳多し今抄に一二

○藤氏傳記の書傍多し敬之せり義教將軍の事

依て仁利寺より注文して近きもの月凡五百六十二部

入道大納言の事今録之永正二年八月廿七日記の事目

に見たり以後録之古が凡百部より日永法

源氏記録抄に又是れ信之

○鈴木源七郎の長康安二年藤原の事今細川相抄

清氏は属し白茅城合戦の討藤原の事

我死す 藤原の事 藤原氏の河平貴の武士細川直

属之 申久し

因云今我の事藤原の事と云傳中此の事

柄と云て清氏の馬と云くと西院中此を平

記あり物物の事藤原の事あり

ゆ

○諸家名記の題目或は唐名や友号や又は居所と名付

し於抄ありに違あはれと畧といひ

孝部王記 或は孝部親王記あり

治相記 治と云は治相と云は相治と云は

長の記

台記

丞相と三台と云稱長の記

山槐記

山と中山槐と云三槐中山因大屋

大府記

大府と大務の意と云大務と大務の記

永昌記

永昌と永昌人多く儀為隆の記

銅駝記

銅駝二条坊之中細云更隆の記

平戸記

平戸東氏戸平戸部氏初平戸氏の記

長秋記

長秋堂八留后文を文庫名留后を文

仰時の記

西記

西と大細云の意と云大細云光雅の記

龍記

龍八中細云と龍也と意と云中細云

光雅の記

右の如く書目於多し門庭の書或は此文をんと云意と  
 と書事常あり意と云とひりふりふりふりふり  
 長秋乃友とありぬ事ありといり多儀と八座と  
 八座と云とありぬ事あり長秋乃八座と云意  
 各あり是八座負多儀八人より出号あり  
 又宰相と云八座と遠ひ行れと古々多儀と宰相と稱  
 其事常とあり八座ありて多儀と  
 心世ありや義あり向あり事は遠とありて儀と遠  
 八座ありとあり行りて八座ありて物事ありん  
 量乃せりてあり



神保来に傳へし丸薬よて豊心丹と云

光淳法師とゆふ人との秘をぬる寺二十八世の位  
持よして天文七年二月廿二日寂を夢よて寺  
富く故をよと云ふと云ふ

天文二十年六月筒井明昭卒せり其の云くして其死を  
ぬくかくしふるに角根所ある集社の邊に黙河原  
とて盲目のるるを歌うとち明昭ふと云ふは  
流音と云ふ聲あり年の月とて同一比あり其  
ハ亦又御病て家を治松念の軍中成王の如く  
けるも後を良治にありてと書成後を付盲  
目よは合流と云てものりかして故よ而後

の儀讀に事と傳りたりて後再平にうと云ふと云  
ぬくあみと云ふと云ふ

○筒井明憲法平天文十二年八月二病死せり其の寵重  
布衣次第八云云十九了幼二高九命を友十九五人殉死  
をと云ふ

尾張三位家荒逝の討つ人殉死の事あり近  
世追後の始のやうにふれとも天文中筒井の死  
を時以殉死あり忠吉の慶長十二年三月薨  
を筒井に後あり事吉年

筒井家人相念を後を改初の名ハ九多市相念右  
近藤京治をり其の之吉伯傳文の太尾因大森右月紀

道行の末孫にして建仁寺榮西僧正東大寺俊宗坊守源上人の才云々

紀系源と梅のうに寺源法久を定池在馬元紀  
<sub>二</sub>素をり三男之業初<sub>一</sub>在馬日<sub>二</sub>年<sub>一</sub>八<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>少女<sub>二</sub>又<sub>一</sub>富  
<sub>一</sub>吹<sub>二</sub>將<sub>一</sub>筒井氏<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>と<sub>二</sub>後<sub>一</sub>唐氏<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>と<sub>二</sub>豊<sub>一</sub>福<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>何<sub>二</sub>を  
<sub>一</sub>あり<sub>二</sub>者<sub>一</sub>あり<sub>二</sub>と<sub>一</sub>中世<sub>二</sub>礼<sub>一</sub>の<sub>二</sub>家<sub>一</sub>と<sub>二</sub>武<sub>一</sub>と<sub>二</sub>智<sub>一</sub>の<sub>二</sub>人<sub>一</sub>と<sub>二</sub>名<sub>一</sub>と  
<sub>一</sub>あり<sub>二</sub>我<sub>一</sub>討<sub>二</sub>と<sub>一</sub>事<sub>二</sub>と<sub>一</sub>豊<sub>二</sub>こと<sub>一</sub>も<sub>二</sub>能<sub>一</sub>る<sub>二</sub>敵<sub>一</sub>合<sub>二</sub>に<sub>一</sub>應  
<sub>一</sub>り<sub>二</sub>敵<sub>一</sub>あり<sub>二</sub>に<sub>一</sub>あり<sub>二</sub>敵<sub>一</sub>あり<sub>二</sub>筒<sub>一</sub>井<sub>二</sub>の<sub>一</sub>藩<sub>二</sub>素<sub>一</sub>に<sub>二</sub>て<sub>一</sub>云  
<sub>一</sub>たり<sub>二</sub>と<sub>一</sub>南部<sub>二</sub>の<sub>一</sub>高<sub>二</sub>人<sub>一</sub>恨<sub>二</sub>後<sub>一</sub>立<sub>二</sub>て<sub>一</sub>殺<sub>二</sub>す<sub>一</sub>中<sub>二</sub>の<sub>一</sub>も  
<sub>一</sub>橋<sub>二</sub>井<sub>一</sub>町の<sub>二</sub>橋<sub>一</sub>を<sub>二</sub>と<sub>一</sub>夜<sub>二</sub>を<sub>一</sub>を<sub>二</sub>信<sub>一</sub>耐<sub>二</sub>所<sub>一</sub>合<sub>二</sub>を<sub>一</sub>是<sub>二</sub>民<sub>一</sub>部<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>

- 富高あり<sub>二</sub>と<sub>一</sub>は<sub>二</sub>一<sub>一</sub>楨<sub>二</sub>乃<sub>一</sub>和<sub>二</sub>と<sub>一</sub>あり<sub>二</sub>自<sub>一</sub>福<sub>二</sub>寺<sub>一</sub>あり<sub>二</sub>流<sub>一</sub>
- 流<sub>二</sub>二<sub>一</sub>余<sub>二</sub>人<sub>一</sub>と<sub>二</sub>不<sub>一</sub>信<sub>二</sub>人<sub>一</sub>乃<sub>二</sub>以<sub>一</sub>法師<sub>二</sub>町<sub>一</sub>人<sub>二</sub>百<sub>一</sub>姓<sub>二</sub>号<sub>一</sub>
- 能<sub>二</sub>合<sub>一</sub>を<sub>二</sub>了<sub>一</sub>余<sub>二</sub>乃<sub>一</sub>勢<sub>二</sub>と<sub>一</sub>以<sub>二</sub>て<sub>一</sub>筒<sub>二</sub>井<sub>一</sub>氏<sub>二</sub>と<sub>一</sub>戦<sub>二</sub>ひ<sub>一</sub>年<sub>二</sub>
- あり<sub>二</sub>以<sub>一</sub>將<sub>二</sub>南<sub>一</sub>部<sub>二</sub>の<sub>一</sub>民<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>多<sub>二</sub>く<sub>一</sub>楨<sub>二</sub>亡<sub>一</sub>り<sub>二</sub>乃<sub>一</sub>所<sub>二</sub>人<sub>一</sub>の<sub>二</sub>合
- 戦<sub>二</sub>と<sub>一</sub>世<sub>二</sub>号<sub>一</sub>人<sub>二</sub>始<sub>一</sub>あり<sub>二</sub>乃<sub>一</sub>屋<sub>二</sub>を<sub>一</sub>
- 傍<sub>二</sub>は<sub>一</sub>姓<sub>二</sub>と<sub>一</sub>名<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>と<sub>二</sub>呼<sub>一</sub>り<sub>二</sub>と<sub>一</sub>橋<sub>二</sub>井<sub>一</sub>紀<sub>二</sub>信<sub>一</sub>正<sub>二</sub>と<sub>一</sub>真<sub>二</sub>海<sub>一</sub>
- 三<sub>二</sub>州<sub>一</sub>諸<sub>二</sub>家<sub>一</sub>の<sub>二</sub>凡<sub>一</sub>牧<sub>二</sub>地<sub>一</sub>右<sub>二</sub>と<sub>一</sub>左<sub>二</sub>と<sub>一</sub>元<sub>二</sub>成<sub>一</sub>定<sub>二</sub>柳<sub>一</sub>京<sub>二</sub>小<sub>一</sub>平<sub>二</sub>を<sub>一</sub>  
此は筒井の  
 地ありと  
 望ありと
- 稻<sub>二</sub>垣<sub>一</sub>平<sub>二</sub>在<sub>一</sub>馬<sub>二</sub>吉<sub>一</sub>原<sub>二</sub>あり<sub>一</sub>と<sub>二</sub>板<sub>一</sub>倉<sub>二</sub>は<sub>一</sub>多<sub>二</sub>と<sub>一</sub>馬<sub>二</sub>の<sub>一</sub>藩<sub>二</sub>を<sub>一</sub>  
松平は馬  
 のありと
- 久<sub>二</sub>江<sub>一</sub>三<sub>二</sub>言<sub>一</sub>帝<sub>二</sub>唐<sub>一</sub>定<sub>二</sub>井<sub>一</sub>と<sub>二</sub>平<sub>一</sub>在<sub>二</sub>馬<sub>一</sub>清<sub>二</sub>秀<sub>一</sub>あり<sub>二</sub>乃<sub>一</sub>藩<sub>二</sub>を<sub>一</sub>  
乃藩ありと
- 各<sub>二</sub>武<sub>一</sub>功<sub>二</sub>拔<sub>一</sub>群<sub>二</sub>の<sub>一</sub>勇<sub>二</sub>士<sub>一</sub>あり<sub>二</sub>と<sub>一</sub>故<sub>二</sub>事<sub>一</sub>に<sub>二</sub>幕<sub>一</sub>下<sub>二</sub>に<sub>一</sub>属<sub>二</sub>せ
- 乃<sub>二</sub>該<sub>一</sub>侯<sub>二</sub>又<sub>一</sub>班<sub>二</sub>せ<sub>一</sub>と<sub>二</sub>南<sub>一</sub>月<sub>二</sub>の<sub>一</sub>あり<sub>二</sub>と<sub>一</sub>



をあらへし事古記よる由是利敷云下此指と過凡  
せしれに未くは多亮の由富所及り記多流也  
○同家にくも又ハ別の家少くも同姓也あはし事す時の  
書或る二不方神交あるを相とす一書と定はる事  
文字ニツ神徳ふあふげハ重に言ふてカニニツまたよる事千本流行を  
右ハ内文子能経冊  
カニニツひつかりの元津多親此を流星のゆ代と照る人  
右ハ内文子能経冊  
凡そ彰しる事ハ下流句のよとありてから古事ハハの  
句をあげてかく事ハ例ありし事  
○浄土宗坊々寺堂流櫻林市化のたさる向のたさる

有る事名もた

名目頌義 二藏 選擇 小玄義 大玄義

文句禮讚論 洋土

右ハ部多部よ流一人ありて可化と持軍を  
公月の可化三年にして頌義可化とありて在る事  
其は年以てハ部留在ハ部留のたよる事十八檀  
栴圓

○尾州二宮大縣神社神を畧系家紋圖のつ川神を  
古宅の祀ハ折裁明神之部勅使宿禰の流日ありし事  
と傳ふ

秀益 重松兵庫介  
応永比

秀滿 次島太夫  
永享比

秀村 中務丞文明比神  
主属斯波前康  
勘武事



秀永 神主左京進 九十八歳

秀春 神主喜三郎 八十八歳

正平 板津中務少輔始任織田家後仕池田家子孫五福家

秀乃富 有藤喜左門 仕酒井右近

女子 倉地兵庫少書

勝正 落合右近將監 春日井郡上末村城主 正時 庄五郎

成正 板津吉左門始仕織田信雄々後神職 成時家相統祖也

正行 板津与三兵衛 仕中川助右門

秀乃久 神主筑後 八十三歳

長治 佐橋右衛門奉仕 子代姫君

長光 佐橋理右衛門奉仕 尾公

信元 佐橋金右衛門

吉信 佐橋九郎兵衛仕 同宮大隅守

秀周 神主正六位上織部正八十二歳 母佐橋右衛門村女

英利 神主兵馬 母細野四郎兵衛母

偏秀 神主織部

英安 平岩十助

秀高 有藤縫之助

主和氏家系と云ふ一或ハ橋と稱一或ハ坂と稱之今據  
其ノハ蓋尾張氏ノ庶流リニ條院應仁元年三月尾張  
國諸社神願廳宣及以同二年正月の下文ニ  
尾張耐尾張治利假名系系保三十七所六段大  
と云々又元禄十五年三月古尾を攝部と云  
是レ尾張山寸の字字尾一傳る山寸ニテ尾名程の  
多ク也世々を以テ考ふるに元禄尾張氏有る事  
明レ也一四事紀述波縣君祖大荒田余云々姓白録

曰倭建尊三世孫大荒田命云云傳云尾張才二  
 云ハ大縣命と云々河内國を阿加多國と改稱し且  
 縣名の姓戸とありハふびに之ける日本武尊  
 乃と尾張宿禰命を祀る神國云々三世孫神孫孫  
 の社ありハ尾張氏と云々神と云々守り授あり小  
 河内橋氏ハ尾張氏社あり云々

二宮  
 古瓦  
 之宮



神と古宅の地と小計と云々  
 亦尾張氏の表地あり云々  
 らん

○尾州玉府之神

中略連ハ天有男命の高より曆志二年八月  
 久日寧相房累政死ハ之を幸徳也神と云  
 あり久日寧命多元政是あり建武四年二月  
 錫應宣ハ是なり代々お継今も畧記之

秀將

神皇御門  
 文の比

秀定

久日寧を祀  
 住于新波家

秀守

神皇御門  
 天文中卒葬玉  
 松下親王

成海

尾八市或稱尾川  
 成國永祿神皇

秀光

尾川源六高屋御回信  
 勅軍幸天正年中神皇

秀正

節々節法有馬

秀信

尾八市長門守

秀利

市丸有

秀富

兵庫今正六位上  
 右近將監

秀勝 九門

○三洲島湯之林寺西山派そのうと淨土の傳尉長元昌湯  
 の城と築任寺一財建之善提乃湯と云々寺名  
 ○余語右邊門を又菅原成政法名梅哲  
 余語長盛

坂井右近將監成種

佐之内藏助成政

大倉右近之身録の世又名由依ハ金河ハ依ハ

本流庶流あり又芳糸とハありハありハ

○凡糸至直下り錦と織ハ系師錦小物及ハ法園錦織

白昔皆係錦と織ハありハ右神美ハ皆未小車局形等ハ錦

あり今やまハ少ハとハ神ハありハとハ用ハありハ物ハ高ハ庶ハ外ハ

物ハとハ上ハ右ハ物ハとハ名ハ由ハ韻ハ府ハ統ハ編ハ又ハ日本ハ此ハ麒麟ハ錦ハ金

花ハ炫ハ目ハとハ云ハハ杜陽ハ雜ハ編ハ又ハ國ハ明ハ霞ハ錦ハ光ハ耀ハ芬ハ馥ハ五

色ハ相ハ尚ハ而ハ美ハ麗ハ造ハ中國ハ之ハ錦ハありハとハ云ハとハ云ハとハ云ハとハ我ハ功ハ子

とハ云ハとハ今ハ系ハ師ハ所ハ織ハ袍ハ衫ハのハ穀ハ統ハ号ハありハ錦ハ羅ハ花ハ綴ハ

をハ見ハよハとハ海ハありハとハ海ハありハとハ物ハ多ハ

○安房ハ白ハ西ハ瓜ハありハとハとハにハ安ハ房ハ姓ハ祿ハをハ世ハとハ一ハ流ハ本ハ姓ハ也

倍ハ此ハ人ハとハ云ハとハ安ハ房ハ對ハちハちハ言ハ信ハ

安房ハ仲ハ磨ハ 泰平ハ 鎮守府將軍

朝任ハ安房ハ九ハ門ハ尉ハ 鳥羽院武ハ者ハ所ハ賜ハ友ハ東ハ此ハ元ハ依ハ安ハ房ハ合ハ而ハ此ハ而ハ稱ハ安ハ房ハ也

致乾ハ六ハ女ハ庶ハ流ハ坪ハ六ハ女ハ後ハ改ハ者ハ九

右京ハ武ハ者ハ所ハ 兼平ハ 安藤ハ 以下ハ畧ハ之ハ是ハ安ハ房ハ永ハ河ハ櫻ハのハ語ハ也ハ清ハの中ハありハ

揚ハりハ仲ハ磨ハハハ中ハ務ハをハ捕ハ安ハ信ハ和ハちハのハ子ハとハ又ハ大ハ細ハ云

和ハ平ハのハ子ハとハ云ハとハ天ハ平ハ格ハをハ云ハ年ハ入ハ唐ハ彼ハ國ハ大ハ曆

云ハ年ハ正月ハ唐ハ主ハ卒ハとハ我ハ光ハ仁ハ帝ハをハ皇ハ元ハ年ハと

云ハれハりハ多ハ好ハ院ハ帝ハ位ハのハ年ハとハ云ハ凡ハ三ハ百ハ三ハ十ハ九ハ年ハと

長間只二代あり、幸ひ殿が一定て世系をうしあつた  
事ある一系あり、かゝる事あり

○その年、やあり、人勢同故を舎せ、此伊藤殿の邊に  
中間ら、しる男乃、此を指あする、との武人、よき事なふ  
くせあり、として、跡をいひ、つり、し、後、三福寺、此門  
前あり、とほあり、し、人、り、れ、り、て、相、と、せ、あ、と、と  
と、は、し、取、つ、り、る、是、ハ、服、後、終、平、の、士、喧、嘩、と、し、の  
家の徒者、く、ま、し、し、人、の、あ、を、は、れ、ま、の、り、波、と、か、て  
か、の、り、を、し、て、お、も、ぬ、し、ふ、も、り、れ、ん、を、は、く、せ、し  
○う、ま、減、た、ら、も、あ、れ、れ、の、ひ、け、人、と、し、を、死、な、某、の、地、に  
敵、あり、と、す、ま、あ、あ、あ、ひ、入、て、首、尾、好、ま、人、の、み、ん、ら、た、せ、ま、に

歸り、つ、り、を、今、一、人、乃、又、年、ハ、徒、者、の、子、を、し、り、し、と、か、也  
あ、ま、り、れ、れ、も、又、よ、あ、ま、り、す、り、の、ひ、く、し、を、ぬ、る、旨、ひ、を、し  
と、も、武、林、の、家、ふ、し、れ、し、し、ん、人、な、れ、り、か、く、つ、り、し、る、事、に  
あ、れ、る、も、徒、者、の、心、と、た、ら、つ、り、し、忠、の、る、と、つ、た  
の、と、し、く、あ、り、幸、あ、り、す、也、癸三月

○癸巳正月十三日院御會始

院御製

○う、た、り、ら、る、その世の翠、乃、り、り、の、春、も、あ、ま、り、ぬ、る、事、の、事、

中院正二位 通躬

○あ、ま、り、ぬ、る、は、も、ぬ、り、で、翠、乃、後、よ、あ、ま、り、あ、り、す、事、の、事、

武者山内正二位 通隆

此も亦ゆりも此流川とよみ初巻もあつる事の有

○三月十三日の夜石松村の稲荷と古後の新祠順敷と近

き三月七日山王様古九日古九日持社の遷座者古九日

○平家物語の傳説とあり公定の分録もまた其持説

底平家源の男民部少輔村長仁平家物語傳説と

記されし撰者一人と云ふと名もはぬよ是後其の多

らぬ

○癸酉三月十日十百麻里流高家村あり古九日古九日

く塵芥と入埋む梅雨の晴間故男た入て芥の行行する

をばと云ふ一人入てる久しくあも又一人の男心と

るかりて井に入しり是も亦よりぬき家内とのむら

急な井なりと傳ありかくと云にこれ古井小光流

あを多汲入て後下り傳をこそ男ひをゆそれ定て

命をばと云ふあ相前打入て入りしり半よりより

ていさふあつたかかかかかかかかかかかかかか

く後下りあ二人と云あけしりあつる死よりり

先に入しはははの男井よりあつるやうく他市に傳り傳り

と疑も然り傳り人りぬしと云ふと人々物語り傳り

言ふはぬれ井はそれるぬすり毒気ありて人を

害す況や汚塵穢芥の埋積りて氣寒る古中土毒

ありしや井降りよのまの冷め多く入て掘り伝と教

下りし是も亦持社の一つなりり



せり也何如故よ當國にわづ傳ありやと云當國に源家  
に中絶あれはまのり三橋胡古渡村を知りせふ也子孫  
又ひまにあり一かとは是(傳)

源為朝 鎮西八郎  
六条判官為義八男

義實 上西院判官代  
隱尾州知多郡

實信 上西院藏人

義房 藏人三郎

僧慶乘 一作慶桑

為頼 於伊豆国大嶋出生

為家 改為政大嶋祖  
大嶋次郎

女子 朝宗 大嶋三郎  
為直 大嶋七郎

也世見たり後裔當まに在り也ふの儀小云古源家

森ハ羽羽此を世を系統と云今ハ八幡と稱する

○日蓮の種姓は佛の裔也其の事一もその細る

○此の二房其高老山延生その什物あり少く彼系

名也書きり按るるに是昔名の稱は信て云るなり

○字水御撰結宗系名より一写也せし古より何の如く

にせしとるもこれハ傳中其係并伊なり貴名は源家

井伊左衛門  
女三子 子也初述并伊家系と云く字を以ては後ハ

彼源流なり也と云く系名とるも之ハ後益源等

と云たり時置山添は源流なり也也如多ハ源家と云

云三國氏と書きしとて今世の源流なりけしと云

化り系系より

貫名正行 大三郎

重實 五郎

重直 太郎

重忠 三郎

重政 太郎

藥王丸 日蓮

重友

○ 氏記より漱若くして系代及古記と考へるは

○ 善好法師ハ貞治元年五月廿三日に死たり因元山乃

○ 藤原蘇我と伊水記より

○ 甲午貞俊の琉球人十二月三日大坂と申す於て二百七

十人薩平中納吉貴朝臣再使と指揮して同り也

船依見心系人足系人馬或是傭夫百二十人強得馬百  
二十足

或人云琉球王の世系也何と申思ふと尚忠記事一篇と  
著し之を世代と書し之を尚忠と改めし也

明朝冊立琉球中山王世系

武寧

中山王察度世子  
永樂二年冊封

思紹 尚已志

尚忠

尚志達

尚金福 實志達弟

金福卒後其弟布  
里子金福之子志魯冊立

尚泰久

布里之弟  
景泰五年勅嗣王封

尚德 天順七年嗣王

尚圓 成化七年嗣子

尚真

成化十五年嗣王

尚清 喜靖十年嗣王

尚元 喜靖三十七年嗣王

尚永

万曆四年嗣王

尚宣 万曆三十二年嗣

薩摩州附庸中山王代



日本の慶長十三年 己酉 明萬曆三十七年 治清家 大神君の

命を奉り中山赴き付て遊ばし之を尚書と書名に

是とて關東小引て 台命ありて中山王に返り

封し薩列の附庸とす 是より毎年初末十二日 以後

從前首此爵位我國の封命と奉す以後與那城王子

八吾 大樹代始の御多と初し金武王子八自嗣封

と謝し安ら禮使ありこれ八自使來聘の事九月十日

柳堂に達しこれ諸大老派し之云唐宣の自使薩

侯家之費用と奉す世后又自王子系來打續と

費とくわしとせし只大樹と名す之使八自延川を

へつと物れし治清家云中山王尚書王后のあり豊

せし治清家元年中山王豊し世子喪とて治清より

冊封使と文を由にわして三年純喪と治清は冊封

嗣位のありと謝し安ら例治清家小定金所あり

明年八自冊封使に到りては依りて以取自使宣示に

赴琉球と府使九月薩川鹿海と十月大坂より船あり

十月大坂を發して七日 休大津宿 八日 休高尾宿 九日 休起

休大津宿 十一日 休起 十三日 休起 十日 休高尾宿 十一日 休高尾宿 十二日 休高尾宿 十三日 休高尾宿

日 休高尾宿 十七日 休高尾宿 十八日 休高尾宿 十九日 休高尾宿 二十日 休高尾宿

十一日 休高尾宿 十二日 休高尾宿 十三日 休高尾宿 十四日 休高尾宿 十五日 休高尾宿

十六日 休高尾宿 十七日 休高尾宿 十八日 休高尾宿 十九日 休高尾宿 二十日 休高尾宿

○ 依り白子とふとありしれありしに白元あり

人好も迎へると五龍姐ふ云り命存り續圖を説に是を  
 社と云つりそむるをバ社時と云ふ周室が衰幸  
 難識と迎時社と云く回回所買或言其腦中有珠  
 社日又文胎の者肌肉純白鬚髮を言のふと云ふと命  
 存りつりそれと徐雲胎七言産化論褚氏が遺云等ハ  
 社り此事なりと此山醫  
 ○社殿を言ふは社稷具は故阜後為の後胡倉義帝以云  
 食を云ふは元年八月十日義景敗れの時刀社故に之  
 社死を

○諸葛孔明謚忠武侯忠義節操後世實無他此我朝羽  
林棟公  
正成資質正大某  
規矩似忠武信

社

程子曰孔明有王佐之心 張子曰孔明其體正大朱  
 子曰忠武侯天質高所為一出於公此類ノ  
語多シ  
 ○本名義仲の男清承冠者系名義日冬とあり東  
 鑑ハ義高と云り平島物語ハ義重に傳る在古  
 一の名揚書ハ信く同矣云一と云てつらつら  
 義仲の女名義王丸と云り古記ハある

Handwritten notes in the bottom right corner, possibly a date or reference: 1851/12/15

Main body of handwritten text in a cursive script, likely a letter or a journal entry. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Vertical handwritten text on the left side of the page, possibly a signature or a specific note.



